座談会　まなぶ

命のためがんばった

三池の子供のその後は？

三池労組員の

親といっしょになってみんなで責める。それでもやっているがどうすればよいか、この悩みをもってやって来られたわけでした。

もう一人の女の人は鹿児島の人でしたが、すでに結婚している人で、結婚後も引き続き運動をやってゆくにはどうするか、ということを勉強したい、ということでしたが、この人は恵まれた人で、こんどご主人さんといっしょに参加しているというのでした。聞けば、まわりの友だちが結婚してはつぎつぎに運動から離れていってしまう事実を、問題にしとられました。

今　村　私は、うちに二人の人に泊っていただきました。一人は川崎製鉄の人で、組合は全労関係だし、こんどの参加も、会社にも組合にも、さらには現在毎日過ごしている寮にさえ内緒だということでした。

もう一人の人は人留米の人で、家が質屋をなさっていて、自分自身も家業の手伝いをしているという変った人でした。会社に就職しきわめたいということでした。

三度目の参加者もいた

堀　田　私の地域では全体で十二名、うちには二人泊っていただいたですが。

一人は動力車労組鹿児島の人で二十五才。この人は三十六年にも私の家に泊めた人で、その後三十七年にもやって来て四山関係に泊り、こんどは三度めの参加だったんですよ。

三十六年に泊めた時なんか、すべてにわたってまだたどたどしいだけの人だったのが、こんどは見違えるばかりに成長して来ていて、その堂々たるそぶりにはまったくおどろきました。交流の場に求めて来る内容が、これまたコロっと違って来ている。三池を知り尽している人だけあって、三池を全日本の労働者階級の闘いの砦として、大事に守ってゆくことが自分の一つの義務だ、といっていられるのにはびっくりしました。

もう一人の人は、宮崎県のえび

――主婦会としてはいかがだったでしょう。

稲　本　主婦会の皆さんは、家計をあずかっていなさるので苦しい時もあったでしょうけど、なぜ第二組合にゆかれなかったのですか。そうすると、少しでもお金が余計もらわれたことでしょうに……と、それがやっぱり不思議そうでした。

私はそのとき、申しました――

谷　田　それに、子どものために。

「命を守るためです」と。すると「第二にゆかないことが、どうして命を守ることになるのですか」と聞かれましたので、続けて申し上げました――「主人には先長う働いてもらわなければなりませんので、やっぱり休憩時間もちゃんととって、体を休めるべき時には休んでもらうためにこそ三池労組に残ってきました」と。

今　村　いや三池の子どもも今では質的に変ってきている。悪くなっている面さえある。

堀　田　以前は、日教組の勤評闘争のときなど、三池の子どもたちはサーッと運動場へ飛び出していたけど。

今　村　今は考えるべき点が出てきています。

めにもとくに三池の子どもは、両親の闘いの輪の中で育ってきたし

今　村　いや三池の子どもも

ことに？

家族ぐるみの明るさに驚く

江　上　国労仙台からやってきた人によりますと、現在の国労にはまさに三池とまったく同じ差別攻撃が加えられ、その上に例のマル生運動をテコに組織分裂の攻撃が加えられているので、三池の怒りが肌身を通じてわかるということでした。

それでも、おどろいたのが三池の人たちの家族ぐるみの明るさだった。悩みは同じであるはずなのに、自分たちはどうもそこがかなわん。いったいどこからきているのか、そう聞かれたんですが、三池の自分たちとしてはもうぎりぎりのところまで追いつめられてしまっているのに対し、国労の方はたとえそこに差別があるといっても〝昇格試験〟なんかの制度があって、まだ昇格できる可能性がある、そこではないでしょうかと答えました。何しろ私たちには、そんな道は何一つとしてなく、少し

問題になったまなぶ受入れ

堀　田　事実は、夜遅くまで話の花を咲かせている。やっぱり取り組みに問題があると思いますね。毎年のことが禍いして、計画の実施がすっかり機械的になってしまっている。

向うは、いっさいの準備をして乗りこんでくるというのに、こっちでは、どんな気持で受入れるのか、かんじんなことさえハッキリし得ないままに受入れる。もっと早くから、どういう姿勢で受入れるかという点について十分討議しておくことが必要だとつくづく思っています。

稲　本　たしかに、私の地域でも話し合いのとき受入れについてむつかしい問題もでてきました。そのときCOヨーカンの販売活動に参加していられる松本さん（宮浦）が、このCOヨーカン販売活動について、全国の職場の人々がどれほど暖い気持で協力してくれているか、また、やってくる人々はそんな職場の人々であることに

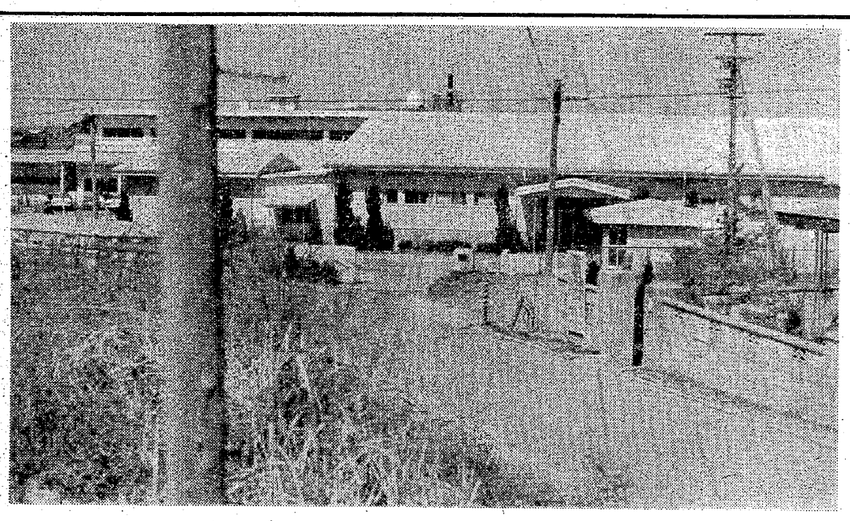
してやるくらいの気持をもつべきではないか、と。

堀　田　たしかにその気持がほしい。とくに、すでに、きたる六月には全国から再度主婦の皆さん方が、交流にやってくられることがはっきりしていることでもありますから、とにかくこれからは計画を早めに投げかけていって十分「どう受入れるべきか？」について話し合うことが大切ですよ。

――今度の反省の上に立って、ですね。どうもありがとうございました。今日はいろんな教訓が明らかにされました。それを今後に生かしながら、闘いをさらに発展させていきたいと思います。

おわび

座談会で話しましたことは、たとえば玉川地域分会の活動など外にもございましたが、残念ながら紙面の都合で割愛せざるを得ませんでした。おわびします。



一見のんきで明るそうな工場の中ときたら、まさに前時代的。

アソニットに働く遺族の訴え

昨年の十月来山した〝CO・遺族実態調査団〟（大橋団長）のときも、余りにもひどい労働条件が問題となった〝荒尾アソニット工場〟（三川鉱炭じん大爆発犠牲者未亡人が働いている）は、その後も少しも改善されないままである。その内部の事情はどうか。そこに働く遺族たちの、率直な声を聞いて見よう。

書きたいことは山ほどある

(1)退職金を決めてほしい。

(2)自分の仕事がない時、外のミシン（五台使えるが、月給までにはとても及ばない）につかされますが、たとえ枚数をしきらなくとも、日給の保障をしてほしい。

四、五百円位しかしきらないので、上役からブツブツ言われるので、外のミシンについた時は、何年たったから日給はやれないと言うことなしに、日給にしてほしい。

(3)自分の仕事があっても、外のミシンの仕事がつかえた時は、つかえた所のミシンにつかせられる。外の人はそのミシンを使いきらないからということで、私たちが行かされ、自分の仕事は山とあっても、その仕事は外の人にやらせる。どれが自分の仕事ときめてはならぬ、と言われます。

でも本職を一つは決めて、その仕事のない時は外のミシンにまわすようなら納得します。

(4)昭和四十四年日給五百四十円の時より、単価の値上げをしてもらっていません。現在日給千八十円。三回昇給しています。

値上げの要求に行くと、「そんな簡単な仕事、だれでもできるわ。安い単価でも、誰でもしたいと言っている」と言って、「単価を上げなくてもしたいと言う人にやらせる」、というような態度に出てくるので、黙って仕事をしなくてはならない状態です。

(5)三井鉱山には、子ども全部が一人前になるまで保障してほしい。子どもが二人まで一日四百円の保障をしたあとの一人を保障しない、というのが不満です。

(6)給料は、毎日一時間乃至二時間の残業をした賃金です。一日も残業しない日はありません。残業して帰るのが当然になっております。その苦労をしての給料です。残業手当も、半分しかついておらないと思います。

(7)市民税ですが、ひとり者が働いても引かれますが、この点どんなになっているか調べて下さい。

(8)書きたいことが山とあるし、話し合う場を設けてほしい。大勢の人前では話せなくても、四、五人集まって話せばなんとか知恵も出るし、心のなぐさめにもなると思います。

夏はマンホールにうじ虫が

以上は〝荒尾アソニット工場〟（従業員数約六百人。三上哲夫社長で、親会社は滝井産業。毛編製品を製造販売）に働いている、昭和三十八年十一月九日の三川鉱炭じん大爆発犠牲者遺族（未亡人）の手記である。もともと遺族の生活対策の一つとして三井鉱山が誘致した企業にもかかわらず、その中で働く遺族がどのような労働条件のもとに苦しんでいるか、よく物語っている。

問題点や要求は、何も右に限ったことではなく、さらに次のように切せつと訴えは続くのである。

今もあった徒弟工場

休日出勤に歩増しもないとは

「通勤手当を全額支給してもらいたい。現在緑ケ丘の山の手から万田公園前まで千六百八十円。そのうち会社負担は千八円？

退職金を、勤続一年につき二万円支給してもらいたい。

請負給で一日働いても、日給に満たない時は、日給として支払ってほしい。（四月から千三百円となる話）

昼食時のお茶の設備を考えてもらいたい。流しの横に、桶になるまま湯を入れておいてある。そのすぐ横で手を洗い、やかんを洗った汁が飛びはねて入るし不潔。冬はよく沸騰したものをのみたい。

第二工場のトイレのマンホールを、何とかしてもらいたい。水飲み場前、仕事をしている時でも、目の前に見える。

第二工場は針と糸屑がトイレによく落ちるためにつまりやすい。そのためにマンホールがあふれ出し、一パイになり、ブクブク。夏になるとうじ虫がウヨウヨ。

会社は使用している従業員だけを、きびしく叱るけど。

下足入れを取りつけてもらいたい。雨の時は昼、雨靴、泥のついたそのままで工場内を歩くので、床は泥がイッパイ。掃除は毎日しているけど、掃除の時は砂けむりのようなほこり。会社は、製品を汚さないようにいっているけど、どちらが悪いか。

玄関を入った正面のドアー。第二工場の真中のドアー。非常の場合は出口が少くてあぶない。

玄関を入った正面のドアーは、中からしばりつけ、明けられないようにしている。

第二工場の真中のドアーは機械が据えてあって、ゆっくり通ったら通れるけど、火急の場合は機械すれすれで危いと思う。

七百名の従業員（会社側に昨年聞いたところでは約六百人といっていたが）がありながら、衛生管理者、および看護婦もいない。常備薬をそなえてほしい。

仕事中に具合いが悪くなった時、休みたい時、休養したい時のために休養室を作ってほしい。

換気孔を作ってもらいたい。第二工場には一つも換気孔がないために、仕事中にむかついたり、頭痛を起こしやすい」

通院者など病人とは認めぬ

このことについては、他の人の手記にも述べられている。

「工場の中は空気が悪くて喉が痛かったり、頭が痛かったりします。午前十時と午後三時に空気を入れかえてもらいたいと思います。第

たとえ公休出勤しても、全然公出の歩増手当はなく、医者の診断に従い家庭で病気療養中でも（会社には診断書提出済み）十カ月以上たつと入院をしなければ、通院では病気と認めない、といわれたこともあるほど」。さらに他の人は手記で訴えている。

「徒弟制度のような感覚で、従業員に対しては仕事の指示をする。たとえば『給料を払っているから五々』とか、朝夕の挨拶をしても上司の一部を除いてほとんど答礼をしない。従業員あっての会社という気持がうすい」

さて、同じ遺族が多数働いている三池縫製工の方は果たしてどうか？